

## アメリカにおける大学院教育としての古代哲学

G. R. F. フェラーリ

カリフォルニア大学 バークリー校

古代哲学というのは古典学においても、また哲学においても、若干特殊な立ち位置の分野です。少なくとも、アメリカではそのような感じで扱われています。さて、ここにいらっしゃる古代哲学の専門家の方々は単にそれを研究しているだけなのでしょうか。それとも私たちは、いずれにせよアメリカ英語ではそう言うわけですが、何か哲学をしているのでしょうか。さて、私たちは哲学をしているのでしょうか、それとも哲学を研究しているのでしょうか。古代哲学は古典学なのでしょうか、哲学なのでしょうか。それとも、何か別のものなのでしょうか。

こうした問題は、古典学の研究では発生しません。他の学問分野でも、古典学の下位領域でも同じです。*Ancient Philosophy* というごくシンプルな名前の学術誌があるということを、例として挙げておきました。そこで、シンプルに *Greek Poetry* という名前の学術誌が実際にあるとしてみます。ギリシアの古典文学を学ぶとしても、自分で新しくギリシアの古典文学作品を書こうとはしないでしょう。実際にギリシアの古典文学を学ぶ場合にはそういうことをするのではなくて、研究をするわけですから。なので、普通はギリシアの古典文学作品を作るとかそういうことはしません。ただここで一つ付け加えておきますと、私がケンブリッジで在籍していたカレッジには、1920年代の初頭にウォルター・ヘドラム (Walter Headlam) という教授がいました。この人は優れた注釈書も書いているのですが、おそらく彼が有名になったのは、彼が新しく韻文で古典ギリシア語の詩を書いたためでしょう。私のカレッジの図書館、ケンブリッジ大学キングスカレッジ図書館には、ウォルター・ヘドラム作ギリシア韻文詩のコレクションがありました。これがヘロダス以降で最高のギリシア韻文詩のように考えられていたのです。

しかし、これは例外です。こんな話は後にも先にも聞きません。彼はギリシア古典文学を研究していたわけですが、だからといって、彼のように新しく文学作品を書こうとする人はいないでしょう。それに、もし

日本文学を研究する人が日本語の詩歌や小説をも書くとしても、それは日本文学の研究とは関係のない試みです。そして、考古学者や言語学者の話になれば、何を研究するのかということとはもっとはっきりします。周藤先生はギリシア考古学者を研究するためにミケーネへ行くわけではなく、発掘をして出土品を研究したりするために行くわけです。こう考えると、違いは明らかです。

さて、歴史の立場は哲学のそれととても似ているように思われます。こう自問することもできるでしょう。歴史を研究する時に、我々は厳密に言って、歴史の専門家であるのか？ それとも歴史家を研究している歴史家なのか？ このように、我々は同じことをやっていた人たち——今我々がやっているのと同じことをかつてやっていた人たち——を研究している歴史家なのだろうか？ これはある意味ではそうとも言えますが、ある意味では違うとも言えます。哲学で起きている事態にきわめて近いことが、実際のところ、歴史において我々が採用すべきやり方である、と言っているわけではありません。つまり、これが歴史においてとられるべきふさわしい方法だと考えられているわけではありません。例えば、ある大学教授がトゥキュディデスが書いたのより、よりよくトゥキュディデスを書き直すことが自分の仕事だと考えたとする、彼はトゥキュディデスと同じことをやるわけです。つまり、尊重されるべきことは、歴史家たちの *historianship* を



分析することですが、それが何を意味するのかというと、それはつまり、彼らはどのようにして歴史を書いたのかということになります。そして、そのディシプリンは、専門分野内部の専門分野です。それは、古典研究の歴史的分野のそのまた下位の専門分野で、特別の名前をもっています。その名前は、ヒストリオグラフィ（歴史叙述）です。ここでさらに問題となるのは、これを正確に行うことができるためには、あなた自身が、調査分析を行う歴史家でなければならないのか、ということです。つまり、あなた自身が、自らもまた歴史を書く人とならねばならないのか、それとも単にヒストリオグラフィを研究する人間でありさえすればよいのか、ということです。この二つは別のものなのでしょうか。しかし、たとえあなた自身が、ヒストリオグラフィを研究するために、歴史を叙述する歴史家でなければならないというのが正しいとしても、その場合でも、通常は、人は自分が、研究対象としている歴史家とは極めて異なる種類の歴史家であると考えられるものです。それゆえ、一般に、歴史それ自体は、文学や考古学、言語学といった、私が考えてきた他の領域と同じように、古代の文化の一側面を研究する研究なのです。

ここで哲学へと話を戻しますと、そこには取り得る多様な方法があって、状況はより不安定です。つまり、古代哲学を学ぶことのできる多様な方法があって、そのうちのいくつかだけが古代史や古典文学に取り組む方法とは異なっているのです。さて、哲学にとってヒストリオグラフィに相当するものが一つあります。あなたがやることは研究すること、つまり、あなたはかつて哲学者たちがどのようにして哲学をするという作業をこなしていたのかというのを研究する哲学者なのです。そして、次のような場合と比べてみてください。私たちがどのようにして哲学をしているのか、今現在どのようにして哲学という営みに従事しているのかということと比べてみてください。

そうすると、例えば、次のような事実に行き当たるかもしれません。つまり、古代の人々がかつてどのように哲学をしていたのかということと、我々が今どのように哲学をしているのかということの間に違いがあるということに行き当たるかもしれません。すなわち、哲学をやるということは、古代の人々にとっては少なくとも二つの異なる事柄を含んでいたということです。一つは果たして何が起きているのかを問う訓練に従事するということでした。人生の意味とか、ほかにもそうした難解で曖昧な問題について問うのはもっ

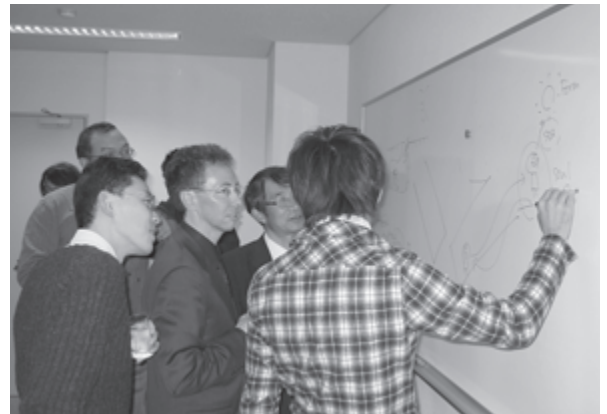
とも根本的な問いであって、今でも私たちにとっては、哲学とは何かそういうものです。こうした人生の意味といったタイプの大きな問いは、現代哲学においてもまだ問題となっています。しかし、これに加えて、古代の哲学者たちにとって、哲学とは知的な生活を志すということを含むものでした。それは個人の持ち得るある種の人生、ある種の生活、ある種の性格を指し示し、決定するものだったのです。哲学者はある一連の問題を探究するただの教授者であるというよりは、特定の生き方をしている、特定のタイプの人でした。したがって、古代の哲学者たちと現代の哲学者たちの間には、驚くほどの違いがあるということになります。

現代では哲学者というと大学の教授ですが、かつての哲学者たちも大学というものを創始しようとした人々でした。大学はその起源をプラトンのアカデメイアに持ちますが、そこでは学者たちが学派を形成していました。学者というのは相互に受け継がれていく諸学派の指導者で、その後継者から後継者へと学派の指導者の地位を譲り渡していったのです。こうした人々たちを始めとして、実際に社会の外側で生活していた人々で、自らを哲学者と呼ぶ人々が実にたくさんいました。ほぼ宗教団体に近い共同体を形成していた人々や、単に社会への反逆者であったようにも思われる犬儒派のディオゲネスのような人々です。すべてこの種の人々は自らを哲学者と考えており、哲学とは生活方法のことを表していたのです。こうした古代哲学の包括的な概観はピエール・アド (Pierre Hadot) の *Qu'est-ce que la philosophie antique* という短い著作に上手くまとめられています。原語はフランス語ですが、*What Is Ancient Philosophy* というタイトルで英訳されています。日本語に翻訳されていないのは残念ですが、翻訳された際にはぜひ読んでみてください。すばらしい本ですから。

さて、古代哲学への取り組み方とヒストリオグラフィへの取り組み方が似ているのではないかという話をしましたが、今度は両者の違いをお話します。歴史家がヒストリオグラフィをやるやり方で哲学者が古代哲学を探究しているのだと想定するのは、実際のところ難しいように思われます。そうですね、例えば、もしヘロドトスがどのように歴史に取り組んでいたのかについて書こうとして、おそらく、現代の歴史家であれば、ヘロドトスが彼の歴史を書いたのと同じ仕方でも歴史を書きほしめないということは明らかでしょう。その歴史への取り組み方は、ヘロドトスのそれとは大きく

異なっているはずで、そこに共通する要素はほとんど、もしくは全くないでしょう。ところが、古代の哲学者たちを研究する時には、そうしたことはそれほど明白ではありません。哲学的諸問題それ自体に哲学者たちの興味があるわけですから、それらにかかわらないようにするというのは格別困難だと思われます。つまり、少なくとも、古代哲学がなんであったかという乱暴な普遍化をいったん措いておいて、古代の哲学者たちが論じる必要のあった固有の論点を考察し始めれば、そうなるでしょう。

ただ、あなたは次のようにして、古代の哲学者を研究することと哲学をすることの間に区別を設けることができるか考えるかもしれません。つまり、それは不可能だということをお話するつもりですが、さしあたってはそれが可能なふりはできるということです。次のように考えてみてください、もし私がやろうとしていることがアリストテレスやプラトンの言っているあることを説明することであれば、あなたは彼らの言ったことを説明しようとしていて、そうして私は哲学史をやっていることになるのです。ところが、もしプラトンが社会について特定の見解を持っていたかどうかとか、彼のイデア論は正しいのかどうかなどを説明しようとすれば、その時には単に彼が何を言うつもりだったのか説明するということを超えて、さらなる問いを立てることになります。そう、プラトンが言いたかったことというのがあるとしましょう。それでは、彼の言っていることは正当なのか、そうではないのか？ 正しいのか、そうではないのか？ それは言うに相応しいことなのか？ これらの問いを立てることになるのです。もしそうしたことを私がやっているのであれば、それは哲学をやっているのだとあなたは言うかもしれません。しかし、こうした問いを立てる時にも、実際のところ両者の間にそのように明確な区別はないと私は考えています。これらを切り分けておくのはほぼ不可能で、次のような問いにおいては両者が渾然一体となっているのが分かるでしょう。「これはどういう意味だろうか？」「これは意味があるのだろうか？」「プラトンがここで言っていることや、対話篇のこの箇所で書いていることは、意味があるのだろうか？」。もしこうした問いに肯定の答えを返すならば、それは意味があるということになります。そう、本当に自分にとって意味があることになるわけですが、そこで実際にやらなければならないことはプラトンが言っていることに同意することではなく、むしろそれが正しいという考えを受け入れることなので



す。自分にとって意味がないと思うことができるために彼の身になって考えることができるべきで、自分にとって意味があるために彼の立場が正しいと想像するべきなのです。こうした取り組み方には名前がついていまして、英語では *interpretative charity* と言います。Interpretative charity という言葉をご存知でしょうか。

ここまでは、古代哲学を研究するということがどのようにして不可避免的に、というよりは自然に、一人の哲学者として哲学的に考察させるのかということを描いてきました。包括的な観点の話をしましたので、今度はアメリカやイギリスにおける古代哲学研究の伝統を詳しくお話します。これらの伝統は概して自分を哲学者と任ずる人々によって築き上げられてきたわけですが、彼らは私が述べてきたような自然的傾向によって、上手い具合に自分たちを単なる哲学史家ではなくて哲学者だと考えていたわけです。さて、英米の伝統には二つの異なる方法というか、二つの大きな潮流があります。そのうちの一つは私がその方法で学生として教育を受け、そこを出発点としているものです。その頃と比べればいくぶん私の視野は広がりましたが、私がケンブリッジにいた時の指導教官であった G.E.L. オーウェン (G.E.L. Owen) がイギリスでの、そしてグレゴリー・ヴラストス (Gregory Vlastos) がアメリカでの、それぞれ分析的手法の主な提唱者でした。現代哲学のツールや方式を古代哲学へ用いて、古代の哲学者たちを批判的・起源的に見極めるという手法が、しばしば分析的手法と呼ばれています。さらに言えば、起源的ということとは、発展的に知るということの意味をしています。例えばオーウェン教授の論文にプラトンの『ソフィスト』——プラトンの対話篇の『ソピステス (ソフィスト)』のことです——についての論文があるのですが、彼はその対話篇において、その対話篇の内に始まり、つまり起源的な点があるのを見いだしたのです。その始まりとは、適正な評価の始



まり、否定についての適正な記述です。否定、つまりどのようにして「～でない」と言うのかという論理学における否定の形式や、「～でない」という命題をどう理解するのかという問題については、それまで他の哲学者たちによつては適切に理解がされていなかったところを、プラトンが先んじてその評価を始め、ついには現代論理学において極めて重要な概念になったというわけです。つまり、これは前進的な見方であつて、哲学者たちはまさに段々と優れたものになっていて、20世紀のケンブリッジやオックスフォードに至る頃には実に申し分ない段階に到達したというわけで、起源的な取り組み方というのはこういった意味です。

さて、第二に、先ほど申し上げた伝統の大きな潮流という点からすれば二番目になります。つまり、これは現代哲学の始まりとか萌芽という視点からではなく、それ自体が十分に完成されたこの上ない哲学であるという視点から、そのテキストに直接的に哲学的価値を見出すものです。その上、その哲学的伝統と同じように、自分が認識しているものの内で直接的に自分自身が活動しているのだと考えさせます。つまり、かつて活動していた古代の哲学者となるのです。ある意味でかつての古代の哲学者と一種宗教的意味で繋がることができるのですが、そこで矛盾に苦しむ必要はありません。それでは、一組の例を挙げたいと思いますが、これらは異なった、それも互いに非常に異なった例です。一つは、Virtue Ethics という名前で呼ばれる領域です。この本をご存知かどうかは分かりませんが、そうですね、イギリスの哲学者で、アメリカでは私の在籍しているカリフォルニア大学のパークリー校でかなりの間教えていた、バーナード・ウィリアムズ (Bernard Williams) をご存知の方ならたぶんいらっしゃるでしょう。バーナード・ウィリアムズは最近亡くなりましたが、アラスデア・マッキンタイヤー (Alasdair MacIntyre) の *After Virtue* や、ウィリアムズの *Shame and Necessity* という本などがあります。これらは両方とも——つまり、倫理性とは何かとか、徳とは何かという議論をする際に、倫理学の領域について言及するのですが——いくぶん、これと似たようなことを述べているように思われます。

かつてのギリシアにおいては、何が善であるのかを決定するために、個人の人生を全体の点から見る倫理的な問いへの取り組み方として、ある一つの方法がありました。それは善を thick concept, 英語ではそういうのですが、その点から議論するものでした。つま

り、倫理的な問いを徳という点から議論し、これらの徳は敬虔や正義や勇気と同様のもので、自身の文化に根付いた、それと深く繋がっているものとして見るのです。自分の文化と繋がっている、自分の文化に根付いているというのはお分かりでしょう。しかし、その後続く哲学の歴史においては、こうした取り組みは忘れられ、失われてしまいました。そして、カントに至ったところで、彼は徳を義務の問題へと作り変えました。こうして義務の公式というものが現れ、徳を個々の行為という点から、そしてこれらの行為が定言命法という義務の格率を満たすかどうかを分析するようになったのです。もしその規則を満たすならばそれは善く、さもなければ善くないのであって、自身の文化との繋がりを失い、とくに徳と幸福の間の繋がりを消してしまったのです。カントにおいて幸福とは善、つまり倫理的な人間であることとは何の関係もなく、倫理性は純粹に義務の問題です。

そうして、バーナード・ウィリアムズとアラスデア・マッキンタイヤーは次のように言った、というよりは自分たちがカント的立場に批判的であることに気づき、我々は昔へ立ち戻るべきであると主張しました。と言つても、時計の針を逆に回すということではなくて、より古代の人々がやっていたのに近い方法で、より徳という点から、よりそれらの徳を現代文化に根付いたものとして見る点から、幸福と結びついたものとして倫理的な探求を行うべきであるということです。つまり、倫理性をこうした thick concept から分析するべきだというわけです。したがって、これは自分を哲学、倫理哲学の一部分をなすものとして見る方法で、より古代の人々がやっていた方法に近いわけです。というのも、古代の人々は現代の哲学者たちにとっては伝統的なものとなっているわけですから。Virtue Ethics が登場する前、つまり *After Virtue* が出版されたのが確か1981年だったと思うのですが、それ以前には、イギリスやアメリカの大学において倫理哲学で活動している現代の哲学者たちのほとんどは、カントの方法で倫理哲学をやっていたのです。

カントがとても偉大な倫理学者であることは疑いありません。しかし、バーナード・ウィリアムズにアラスデア・マッキンタイヤー、そして他の人々はカント的な手法が正しいやり方なのかどうか疑問を投げかけ、新しい、異なったタイプの倫理哲学への探求をいかにして作り出すのかという着想を求めて、ギリシアへ目を向けようと提案したのです。これが第二の伝統ですが、さらに別のものもあります。レオ・シュトラ

ウス (Leo Strauss) の著作が日本で有名かどうかは知らないのですが、アメリカではとくにレオ・シュトラウスの著作が高い影響力を持っています。そして、プラトンを最大の代表者と考える政治哲学の伝統を復活させるものとして、同じ方法で古代哲学を取り扱っています。ここではその詳細に立ち入ることはしませんが、これはまた別の例ということになるでしょう。

こうして、これら二つの伝統が、英米圏においてその役割を伸張させてきたのです。アメリカにおいては、レオ・シュトラウスの伝統に従って活動する人々と、起源的な見地から活動する人々との間に、確かに多少の敵対関係があります。なぜなら、後者は純粋に古代哲学を受け入れるよりも、批判的であるべきだということを含んでいるように思われるからです。しかし、古代哲学を超えてどれだけ離れてしまったのかということは認識するべきだし、その思想を失わないようにもしなくてはならないでしょう。Virtue Ethics がこれほど興味深いものなのは、それが古代の人々がやっていたことを現代の文化に適用することで彼らを超えようとすると同時に、それを評価しようともしているからなのです。それは古代哲学の価値を認め、そして古代の人々は古代哲学が興って以来、間違いなく何らかの正しさを持っていたと主張することです。

それでは、ヒストリオグラフィとの比較に話を戻しましょう。三番目に挙げた古代哲学に評価を認める伝統は、哲学においてと同じようにはヒストリオグラフィにおいて受け入れられないであろうと考えられるのですが、その理由は単に哲学者がやっているのと同じように、自分が普遍的な問題を扱うのだと歴史家が考えていない点にあります。歴史家は現代の文化が歴史を扱うやり方で歴史を扱います。哲学者たちは、自分たちが何かより永続的な、ある意味では常に同じであり続けているような問題を考えているとみなしたがる傾向があります。哲学的な諸問題は、まさに歴史的なそれよりも元来いっそう普遍的であるように思われるのです。

さて、今度は第四の項目、古典学での話をしましょう。私は現在古典学科で教えているわけですが、一般的にアメリカの人文領域においては——私は日本で同じような状況になっているか知らないのですが、是非ともどうなっているのかを聞きたいところなのですが——とにかくアメリカとイギリスの人文領域では、ある見解が文化や時代を横断する永続的な妥当性を持ち得ると主張する人は、ここ25年以上誰もいません。そのような立場は疑いのまなざしで見られるようにな

ったわけですが、それは科学者ではなく、ある領域で活動している人たち、それもおそらくは歴史家ではなくて、人文学のある領域で活動している人々によって、そうしたものは相対的であるという考えのもとに疑われるようになったのです。文化を横断して継続するような永続的な真理は存在せず、むしろ真理はある文化と関連するものにすぎない、というわけです。そこで、もし人文学においてそのような取り組み方に心惹かれるものがあって、古典学者として古代哲学をやるとすれば、すなわち研究しようとするれば、今この時代に古代哲学をやろうとするのではなく、第四のやり方、次のようなやり方で古代哲学を研究することになるでしょう。つまり、今日の人文学ではとてもありふれたものですが、古代哲学を単に一つの論、他のいくつかの中の一つの論もしくは探求の方式、他の多数の中の単なる一つのものであるとして扱うことです。そして、ギリシア・ローマの文化に根付いたものとして古代哲学を見ることになります。この方法は第一の取り組み方と異なったものです。覚えていらっしゃるでしょうか、つまりは現代の哲学者と対比させて古代の哲学者を研究するということです。その場合、古代の哲学者がどのように哲学をやっていたのかという方法と、現代の哲学者がどのように哲学をやっているのかという方法の間にどれだけの違いがあるかを研究することになるでしょう。

これとは違うやり方で、つまり古典学者として古代哲学を研究しようとするれば、古代と現代の哲学を対比するのではなく、古代哲学と古代の歴史家、もしくは古代の政治論や文芸論を対比させることになるでしょう。古代の哲学者たちは真理についてどのように考えていたのだろうか、古代の詩人はどのように真理に取り組んでいたのだろうか、というようにですね。例えば、近年取り上げられている例を挙げるとすれば、プラトンとイソクラテスがどのように活動していたのかを調べるとして、彼らは二人ともソクラテスの弟子だったわけですが、どちらも自分たちのやっていることをギリシア語の「フィロソフィア」という名で呼んでいました。明らかにこれは英語の哲学という単語に相当するわけですが、今日ではイソクラテスは哲学者とは考えられておらず、プラトンのみが哲学者と見なされています。イソクラテスは古代哲学の流れにおいて研究をしたのではなくて、古代の弁論術の流れにおいて研究をしていたわけです。私はイソクラテスを弁論術、つまり説得的な語り方を教える学校の創設者と捉えています。そこで問題は、「哲学とは何か」という

ことについて我々が現在持っている考えが、プラトンとイソクラテスの縄張り争い (turf battle) の中でどのように発展しはじめたのか、ということになります。つまり、誰が命名権、自分を哲学者と呼ぶ権利を持っていたのか、ということ争う縄張り争いです。

はたして、プラトンがその権利を持っていてイソクラテスを否定したのか、それともイソクラテスが権利を持っていてプラトンを否定したのでしょうか。こうした争いはプラトンと彼がソフィストと呼ぶ人々との間にもありました。イソクラテスにとっては、哲学者とは社会的な指導者であって、彼の生きた社会における政治的プロセスの多くの部分を担い、善き人とは何であるかという問題を考えますが、しかしそれを、社会を導くという文脈の中で考察するような人物でした。プラトンにとってより重要なのは、当時の学者たちと対話すること、数学をすること、当時の政治的プロセスからは距離をとることであり、それはイソクラテスにとっては抽象的で空想にふけているとして非難されるべきことでした。

こうした争いの後に生じた競争、つまり誰が自分を哲学者と呼ぶ権利を持つのかという競争に、哲学とは

何であるかと言う現代の考えは由来しているわけです。明らかに私たちにとってはプラトンが勝利者だと思われるのですが、遡ってみればその戦いで彼が勝つと決まっていたわけではありませんから、その競争自体を我々は研究することになるでしょう。すなわちある議論、古代の諸学派、古代の学校教育の制度といった文脈の中で、哲学とは何かという問題を考えるのです。そして、今日のアメリカにおいては、哲学科ではなくて古典学科の大学院において研究をする古典学の研究者になろうと考えている学生は、こうした取り組み方をしています。彼らがもっとも快適だと感じるやり方がそれなのです。

しかし、哲学科の大学院生として古代哲学を研究している学生は、二番目と三番目を折衷した取り組み方で研究をしているようです。そして、今はパークリーの古典学科で長い間教えているわけですが、私自身元々は哲学科で学んだ人間として、イェール大学で教える時には両者の間に何か橋渡しをするようなことをしています。二つの領域の橋渡しをする活動の一部が、そこで私が持っている共通の講義というわけです。以上です、ありがとうございました。

**Q:** 先生のご講演について、三つほど質問をさせていただきたいと思います。一つ目は、イギリスについてはどうなのかということです。先生のお話は——今日のお話はアメリカが中心でしたが、イギリスではどうなのでしょう。二つ目は、レオ・シュトラウスについてです。彼についてはあまりお話されませんでしたが、日本でもレオ・シュトラウスの著作はいくつか翻訳されており、非常に研究されています。そこで、アメリカでの彼の哲学への評価はどのようなものなのでしょう。そして、ハイデガーについてお尋ねしたいというのが三つ目の質問です。と言いますのも、もちろんご存知のことでしょうが、彼はプラトン、アリストテレスをはじめとして、ギリシア哲学について多くの研究をしました。もちろん、彼はギリシアの古典についての専門家ではありませんが、私が言いたいのは、彼が自分の古典学研究を基礎として、独自の体系を構築したということです。ハイデガーはお話にあった四つのタイプのうち、どれに分類できるのでしょうか。私は彼をどこに入れたらいいかわからないのですが、この方法でハイデガーの場合をどのようにお考えでしょうか。

**A:** 非常に興味深い話題をありがとうございます。

これらの質問を出していただいて、嬉しく思います。そうですね、一つ一つ考えさせていただいてよろしいのでしょうか。イギリスではどうなのか、ということでした。それでは、最初に次のように言うべきでしょう。私はイギリスで教育を受けたわけですが、教えたのはアメリカにおいてです。しかし、もちろん、イギリスにおいてどのように研究が行われていたのかということはよく知っていますし、レオ・シュトラウスがアメリカではある意味重要であるけれども、イギリスでは重要ではないということを例外とすれば、両者は似通っています。そして、私たちが古代哲学の英米における伝統について語る時に英米という言葉を使う理由がこれです。アメリカの哲学科は、その取り組みにおいて大陸よりは分析的で、つまり、そこで鍵となる哲学者はカント、ヒューム、現代ではデイヴィッドソンのような、ハイデガー、フッサール、メルロ＝ポンティ、また彼らに似た人々に反対する哲学者です。大陸的伝統とはそれを指します。そういうわけで、アメリカの諸学科では一般的に哲学に分析的な取り組みを適用し、古代哲学にも適用します。ですから、アメリカの諸学科で古代哲学がどのように扱われているかと、イギリスで私の母校であるケンブリッジ



や他の諸学科でどのように扱われているかの間には、実質的に違いはないと言っていいでしょう。例えば、現在ケンブリッジ大学の古代哲学の Laurence Professor であるデイヴィッド・セドレー (David Sedley) が、彼は本当にイギリスにおける古代哲学研究の第一人者ですが、その彼が二年前にパークリーで大きな連続講義をしました。しかし、そこにはまったく齟齬がなかったのです。そういうわけですから、両者は単一の伝統であるということが言いたいのです。

アメリカから見ると、レオ・シュトラウスはとて大きな問題です。というのも、実際のところ、彼の政治学が彼に対する敵意を生み出す原因となっているからです。彼の政治学と、彼の伝統のもとで活動をしている人々は、アメリカの大学教授たちからはあまりに右翼寄り、あまりに保守的だとして攻撃されているように思われます。そして、アメリカとイギリスの学者の中には全般的な傾向がありますが、イギリスとイギリスの学者たちは政治的な意見について左側、自由主義の方へと——アメリカでは自由主義と呼びますが——、政治的な意見について自由主義の側へと寄りかかりがちであるのがその理由です。そのため、人々は彼について疑念を抱いています。これが第一点です。

次に、彼が何を言っていたのかという内容の話になると、問題は次のようになる傾向があります。私が言ったように、古代哲学への分析的なアプローチの立場というのは——シュトラウスが言っていることは重要ではない、むしろ批判的であるべきである、古代の哲学者たちにそのまま与するべきではない——いわば、古代の立場を受け入れようとしません。だから、レオ・シュトラウスが、プラトンは例えばユートピア主義がはらむ諸々の危険について——ユートピア主義は内在的に危険である、という点で——正しかった、と言っているように思われる点から……。それは、ほとんど、プラトンがそう語っていたのだから、彼らが彼をそのように見ていたかぎり正しい、と言ったものとされているわけです。しかし、これはシュトラウスへの公正な取り組み方だとは思えません。私はレオ・シュトラウスについてよい点を認めたいと思っていますし、私はシュトラウスについてかなり色々を書きました。そして、私が編集した *Cambridge Companion to Plato's Republic* では、デイヴィッド・セドレーやそうした人々と並べて、シュトラウスの伝統において活動している寄稿者を二、三人含めることにしました。つまり、私が言っていた橋渡しとはこのことです。

このように、シュトラウスは彼が影響を与えた人々



の中ではとても影響力があります。おわかりでしょうか。シュトラウス学派に属する学科や教授たちがかんりの程度あり、シュトラウスが亡くなってからかなり経ちますが、彼の教えを受けた人と彼の後継者たちが一致団結し、重要な学派となっているのです。つまり、それはアメリカにおいて近年とくに政治的に重要となったのですが、その理由はジョージ・W・ブッシュの内閣で働いている新保守派の多くが、かつてシュトラウスに師事していたからなのです。そして、そのことはまさに自由主義で左翼でもあるアメリカの大学教授たちが批判的になる別の理由なのです——これはレオ・シュトラウスへの敵対を強いものとしています。

さて、ハイデガーについての質問はとくに面白いと思います。ですが、ごく簡単にお答えしておきます。先ほど挙げた四つの分類のうち、ハイデガーに当てはまるものはありません。ハイデガーの古代の人々に対する関係は、プロティノスのプラトンに対するそれに似ています。プロティノスは自らをプラトンの解釈者で、追隨者で、読者で信奉者にすぎないと称していました。しかし、実際に彼のやっていたことは、彼独自の哲学だったのであり、ハイデガーもそれに似ています。彼は自らをヘラクレイトスについて講義をしているとして、もしくは単に——アリストテレスやプラトンの立場を整理して述べているにすぎないと称していましたが、ハイデガーはそれらを踏み台に、そこから跳躍するための台として使ったのです。彼は独自の哲学者であって、シュトラウスとは反対に、哲学を解体したのです。ご存知のように、彼は実際にはプラトンの解釈者でも、プラトンの追隨者などでもなく、そうして彼自身の力で哲学者となるために、同じ道をまったく歩んでいません。そうではなく、ハイデガーは大分異なっています。彼は古代の人々を研究する人間であるというよりは、古代人から着想を得た哲学者なの

です。

**Q:** 私は大学で非常勤講師をやっております、専門はデカルトです。二つ質問をさせていただきます。第一に、哲学においては哲学者の言っていることを明らかにすること、哲学者の理論が正しいかどうかを明らかにすることの間には明確な区別はなく、また哲学史と哲学の間にも区別はないとお話されましたが、それについてはどのようにお考えでしょうか。哲学史と哲学の間には区別があると私は思うのですが。なぜなのか、理由をお聞かせください。第二に、私もまた哲学を教える身ですが、どのように古代哲学を教えるのでしょうか。具体的な例としては、ギリシア語でテキストを読むのか、それとも英語で読むのか、英語で書く授業をするのか、それとも正義について論じたりするのでしょうか。具体的な例をお聞かせください。以上です。

**A:** わかりました、それではおっしゃるように具体的にお答えします。そう、まず哲学史をやることと哲学をやることの間には区別がないとは言っておりません。それほど明確ではないと言いました。それは人が考えるほどには明確ではないのですが、その理由は次のようなものです。そうですね、では歴史との対比に話を戻しましょう。それでは、私がヘロドトスを研究しているとしましょう。私はなぜヘロドトスが、ヘロドトスのような歴史家が、どうして彼がやったように書いているのか、彼が書くところのものを書いているのかを明らかにしようとする際に、自問自答するかもしれません。なぜ彼はそれを語ったのか？ なぜ彼はそのやり方で書いたのか？ そうして、どのようにして彼が歴史に取り組んだのかを明らかにしようとするでしょう。しかし、もし哲学者について同じ質問をするとすれば、そこにはある哲学的立場、哲学理論、哲学者の行っている哲学的議論があって、その哲学的議論を理解するために、私は自問自答しなければならないでしょう。それは単になぜ彼がこのやり方で書いたのかということではなく、むしろこの立場にはどんな意味があるのかということです。この立場には何か意味があるのだろうか？

そして、その問いに答えるためには、次のことを考えなければなりません。つまり、彼の立場が哲学的に機能していると私は考えているのだろうか、ということです。それは哲学的な議論として機能しているのだろうか？ そして、そのことは正しいかどうかという疑問ととても近いのです。そこで、私はそれが正しくないと考えて終わるかもしれません。しかし、私の

思考は次のような方向へと進んでいきます。なぜ私はそう考えるのか、それが正しいかもしれないという思考を受け入れながら、その後で違うと私は結論するかもしれません。その場合には、私はこれに同意しないことになります。しかし、それでも私が同意しないと決定する際にもなお、この世にいないその古代の哲学者と想像上で会話をするかのように考え続けます。それは、ヘロドトスを分析するのとは反対の仕方です。ヘロドトス分析の場合には、彼の政治的立場がどのようなものか、なぜ彼はあるアテナイの政治家がやったことを賞賛し、別の政治家がやったことは賞賛しなかったのかなど、こうした問いを考えます。政治家のやったこと、つまりあるアテナイの政治家がやったことを自分が賞賛するだろうか、などと自問自答することは決してありません。つまり、そのために、自分を過去の時代、彼の立場に身を置いてみる必要はないわけですが、プラトンやアリストテレスがどんな議論をしているのかを評価するため、哲学的に考えるためには、それが必要となってきます。これが両者の違いです。

そう、これが、哲学と哲学史の違いがそれほど明確ではないと、私が言う理由です。いや、もちろん、歴史上の哲学者たちが持っていた歴史的な立場についていかなる問いをも問うことなくそれだけで哲学をやることができる、ということについて、あなたに同意します。思い出すのは私がハーバードにいた時、そこで3年間学生として過ごしたのですが、ヒラリー・パトナム (Hilary Patnam)、哲学者のヒラリー・パトナムが講義をやっていて、最初の講義で彼はこう言いました。「このハーバードでは、我々は哲学について語る、ということとはしない。我々はただ哲学をやるだけである。ここハーバードでの活動とはそういうものである。デカルトのような人々について語る時ですら (実際、それは実際にはデカルトについての一連の講義であり、それは通常ないことです。奇妙なことかもしれませんが)、我々はここで哲学をやっているのだ。我々は決して哲学史家であるということはありません」。ですから、ヒラリー・パトナムにとっては、「自分は哲学史家ではない。たとえ、デカルトについての講義をやっている」と語ることは、とても重要なことだったのです。「私は哲学者として講義をやっている。これによって、デカルトから何らかの立場を引き出す。そしてそれらを用いて、哲学をやるのだ」というわけです。

これが一点で、また別の点もあります。当然ながら



一方では、まだ生きている哲学者は、考察の対象外になります。そして、あなたの哲学的活動は、と言えば、ここ10年の間に、主だった哲学の学会誌に発表された極めて重要な論文に集中することになります。それがアメリカで「哲学をやる」もっとも一般的な方法です。その意味では、もちろん哲学史と哲学そのものをやることの間には明らかな区別があります。しかしながら、私が明らかにしたかったのは、あなたが哲学史をやっている時でさえも、哲学者として考えることを強制しない方法でやることはほとんどない、ということです。

私がどうやって哲学を教えているのかという質問についてですが、それは授業の種類によります。私は主として3つの違う種類の授業を持っています。ひとつは大学院のセミナーで、古典学科から来る学生もいれば、哲学科から来る学生もそのセミナーにはいるのですが、哲学科から来た学生であっても、ギリシア語を読むことができなければなりません。たいていは古典学科の学生の方がギリシア語ができますが、少なくとも全員読めなければなりません。そして、ギリシア語や哲学から生じた論点を検討します。これが大学院レベルの授業です。学部のレベルでは、パークリーのように大きな大学では、私のコースは私が授業をする古典学専攻のいくつかのコースに分けられます。そこで、ギリシア語で授業をしています。ギリシア語のテキストを読むのですが、それぞれのコースにいくつかの小さなクラスがあります。そして、同様に私が授業をする大きなクラスもあります。私の哲学入門の授業は大体100人から200人の学生がいて、その中にはエンジニアだったりコンピュータ・サイエンスをやっていたりする学生もいます。そこでは、学生は翻訳でテキストを読むだけです。そして、私が授業をして、それから小分けにしてディスカッションをする時間を取ります。大きいクラスを小さなグループに分け、ディスカッションをやる授業をするわけです。ディスカッションは大学院生主導で行い、senior graduate studentsが指導をします。私は実際のところ分けたグループのうち、一つを自分で担当します。その方が、ディスカッションを楽しめますから。しかし、そういった細かい部分は担当しない教授もいます。彼らは大学院生にすべての指導を任せていますが、それがアメリカのシステムの独特なところですよ。

Q：古代哲学の展望を説明していただき、大変嬉しく思います。それで、私の質問は部分的には2番目の質問に関係するものです。哲学に携わっている学生た

ちの態度はどのようなものかをお尋ねしたいのです。学生、パークリーのあなたのコースに哲学をやっている学生はどれくらいいて、彼らのうち何人程度が大学院へ進もうと考え、そのモチベーションは何なのでしょう。

A：大変面白い質問です。ひとつ申し上げておきますと、これからお話しするのはアメリカでの話です。実際のところ、アメリカとイギリスでは違いがあります。アメリカでは、古代哲学は基本的に古典学科ではなくて哲学科で行われていますが、それはグレゴリー・ヴラストスの遺産です。グレゴリー・ヴラストスはアメリカでは古代哲学の極めて重要な専門家で、古代哲学の専門家が少なくとも一人いなければ、アメリカではどれだけの規模の哲学科であっても完全なものとは言えない、という状況を作り上げたのです。古代哲学は、哲学研究の鍵となる決定的な一部分なのです。ですから、古代哲学は、哲学科において非常に尊重されています。古典学においては、かの問題、人文諸学について申し上げたあの問題ゆえに、それほどまでには尊重されているわけではありません。ですから、哲学者たちは自分たちが人文学に属しているとは考えていません。彼らは自分たちのことを社会学者だと考えているのです。ですが、人文諸学は、いくつかの問いを永続的な価値を持つものとして見るような人々を、疑いを持って見るのです。そして、哲学というのが、人文学の中でも、その立場への傾向性を最も多く持っている一部である限りにおいては、疑いを持って見られることでしょう。

目下のところ、古代哲学は、古典学においては、哲学の分野においてほど人気があるわけではありませんが、哲学においてはとても人気があります。ごく単純なレベルでのモチベーションのことを言っているのですが、もちろん学生には古代哲学をやる知的なモチベーションがあります。つまり、古代哲学が魅力的なものを生み出す源泉となっているのです。と言いますのも、哲学をやっている大学院生の多くは、自分が難問を解く能力を持っていると考えるのが好きです。特別な哲学的思考法があって、これがアメリカの哲学科における取り組み方なのです。この特別な哲学的思考法というのは、難問を突破し、議論における繋がりを見つけ、論理を見抜き、論理の行き先を理解して評価するのがとても上手い、ということです。そして、古代哲学のテキストはまったく突破しがたいのある難問だらけのものです。突破するというのは解くということで、それらが馴染みのないものであるだけ、いっそう

解きがいがあるのです。というのも、これらの哲学者たちははるか昔にこれを書いた上に、そこには実に多くの要点があって、そのためより多くの難問が含まれているのです。

このように、難問についての固有な哲学的関心が古代の哲学者たちによって示されているのです。そもそもアメリカの哲学科は——ここで最初の点に戻りますが、そもそもアメリカの哲学科は、少なくとも古代哲学の専門家が一人いないと完全とは言えないので、就職はたくさんあります。就職の見込みがある役職はたくさんありますから、大学のポストに就きたいなら、進むにはいい分野です。というのも、就職はたくさんありますが、優れた専門家はそれほど多くないからです。例えば、形而上学でポストの公募があったり、倫理学や道徳哲学で哲学のポストの公募があったりすれば、それをとてもたくさんの大学院生と競うことになるでしょう。

もし古代哲学でポストの公募があれば、競争者は少なく、数は多いです——そう、これが、学生たちを惹きつけるより現実的な別の理由です。しかし、私が言うべきただ一つのことは、学部レベルで、哲学はアメリカではとても人気のある科目である、ということです。とても、とても、とても人気があります。ですから、私は古典学科で古代哲学入門の授業を持っていますが、大体100人から120人の学生が来ます。哲学科にも同様に古代哲学入門の授業があります。そして、これらの両方に、古代哲学の場が準備されてい

て、これら両方のコースで、スペースを使うことができます。競合はしていないわけです。哲学科では、このコースは哲学をメジャー（主専攻）とする人たち向けですが、250人も受講者がいます。コンピュータ・サイエンスをやっている人とか、経済学をやっている人にも、哲学は人気のある学習課題です。学生の主専攻は経済学だったり、コンピュータ・サイエンスだったり、生物学だったり、法律だったりしますが、彼らは幅ある課題の一つとして哲学のコースを取るのでしょうか。

このように、主専攻とは別にコースを取ったりするなど、哲学はこれら主専攻以外のコースとしてとても人気があります。非常に人気があり、数百人の学生が来ます。また哲学の主専攻だけでも、100人ほどの学部学生が哲学を主専攻としており、同じようにとても人気のある科目です。単に哲学的な問いが魅力的だということもありますし、それが他の多くの領域でも有用そうに見えるということもあります。経済学者や、将来の法律家、将来のビジネスマン、将来の経済学者、そういった人たちにとって、役立つように見えるわけです。こうした学生たちがいるわけですが、実際私はこうした学部の学生たちに授業をすることが楽しみです。というのも、たとえば、コンピュータ・サイエンスをやっている学生などは、とても頭が良いことが多いですから。ですから、彼らは教え甲斐があります。

**司会：**どうもありがとうございました。